

奥田喜久男の千人回峰

人には物語がある。



感動は物語を生み、人は共鳴する。

そして、さまざまな示唆を得る。

今年も物語を紡いだらうか。

人生を織りなす縦糸、横糸。

一本一本紡いだらうか。

“千人”の回峰は“千”の物語を生む。

249  
人目



数据堂(北京)科技股份有限公司  
創設者兼CEO

斉紅威  
Qi Hongwei

AIは神秘的で可能性にあふれ  
チャレンジングでチャンスをもたらすもの

『週刊BCN』vol.1807(1/6) 『週刊BCN』vol.1808(1/13)

250  
人目



PAOSNET(上海) 首席代表  
文化研究者、伝統工芸師

王超鷹  
Wang Chaoying

文化大革命に翻弄された少年時代  
伝統工芸への道を見いだす

『週刊BCN』vol.1809(1/20) 『週刊BCN』vol.1810(1/27)

251  
人目



青山学院大学 大学院  
社会情報学研究科 特任教授

阿部和広  
Kazuhiro Abe

Macintoshの登場に  
次元の違う未来を見た

『週刊BCN』vol.1811(2/3) 『週刊BCN』vol.1812(2/10)

252  
人目



クオインタムリープ  
代表取締役ファウンダー&CEO

出井伸之  
Nobuyuki Idei

自分にとってではなく  
ソニーにとって何が最善かを  
判断基準にしてきた

『週刊BCN』vol.1813(2/17) 『週刊BCN』vol.1814(2/24)

253  
人目



コンピュータソフトウェア著作権協会  
(ACCS)  
専務理事

久保田 裕  
Yutaka Kubota

権利者とともに著作権を守り  
ソフトウェア産業を支える

『週刊BCN』vol.1815(3/2) 『週刊BCN』vol.1816(3/9)

254  
人目



久留米工業高等専門学校  
制御情報工学科教授

黒木祥光  
Yoshimitsu Kuroki

難解なテーマでも  
理論通りに答えが出てくるのが  
楽しい

『週刊BCN』vol.1817(3/16) 『週刊BCN』vol.1818(3/23)

255  
人目



千葉県南房総市教育委員会  
教育長

三幣貞夫  
Sadao Sanpei

教育とは生き方を教えること  
教える続けるために学び続ける

『週刊BCN』vol.1819(3/30) 『週刊BCN』vol.1820(4/6)

256  
人目



皇學館大学 教育学部教授  
博士(学校教育学)

大杉成喜  
Nariki Osugi

学生時代、教授に声をかけられて  
障がい児支援の道を歩みだす

『週刊BCN』vol.1821(4/13) 『週刊BCN』vol.1822(4/20)

257  
人目



アスク  
代表取締役

武藤和彦  
Kazuhiro Muto

初めてコンピューターにふれたとき  
からこの業界の発展を予見した

『週刊BCN』vol.1823(4/27) 『週刊BCN』vol.1824(5/4・11)

258  
人目



ベガシステムズ  
代表取締役

若尾和正  
Kazumasa Wakao

世界初の完全自動化で  
LANケーブルの構造改革を果たす

『週刊BCN』vol.1825(5/18) 『週刊BCN』vol.1826(5/25)

259  
人目



古典藝術家

松本瑜伽子  
(チャチャ)  
Yukako Matsumoto

特異な家庭で育ち  
数奇な運命に翻弄される

『週刊BCN』vol.1827(6/1) 『週刊BCN』vol.1828(6/8)

260  
人目



アンジコア  
代表取締役

山根維随  
Izumi Yamane

「身体をよくする仕事がしたい」  
という思いが漆喰と無垢の木の  
家づくりにつながった

『週刊BCN』vol.1829(6/15) 『週刊BCN』vol.1830(6/22)

261  
人目

登山家  
(無名山塾創設者)

**岩崎元郎**  
Motoo Iwasaki

あんなキャラバンシューズを履いて  
山に登りたいなあ

『週刊BCN』 vol.1831 (6 / 29) 『週刊BCN』 vol.1832 (7 / 6)

262  
人目

月兎舎  
発行人

**吉川和之**  
Kazuyuki Yoshikawa

今年で創刊20年  
伊勢発信のローカル誌を今日も編む

『週刊BCN』 vol.1833 (7 / 13) 『週刊BCN』 vol.1834 (7 / 20)

263  
人目

山岳ガイド／旅行作家

**堀源太郎**  
Gentaro Hori

人生のすべての原点は  
自らの足で東海道を踏破したことに  
あった

『週刊BCN』 vol.1835 (7 / 27) 『週刊BCN』 vol.1836 (8 / 3)

264  
人目

伊弉諾神宮 宮司

**本名孝至**  
Koshi Honmyo

国生み神話の里とお社  
お守りして30年

『週刊BCN』 vol.1837 (8 / 10・17) 『週刊BCN』 vol.1838 (8 / 24)

265  
人目

ユニコーン代表取締役社長

**中島勝幸**  
Katsuyuki Nakashima

持ち前の“高専魂”を発揮し  
障がい者の日常を支援する

『週刊BCN』 vol.1839 (8 / 31) 『週刊BCN』 vol.1840 (9 / 7)

266  
人目

フジシール 代表取締役社長

**松崎耕介**  
Kosuke Matsuzaki

同じ外資系企業でも  
国民性が異なれば事業展開も  
違ってくる

『週刊BCN』 vol.1841 (9 / 14) 『週刊BCN』 vol.1842 (9 / 21)

267  
人目

網屋  
代表取締役会長CEO

**伊藤整一**  
Seiichi Ito

父の経営姿勢に学び  
「破産だけは絶対にすまい」と

『週刊BCN』 vol.1843 (9 / 28) 『週刊BCN』 vol.1844 (10 / 5)

268  
人目

キューアンドエー  
最高幸福経営責任者(CHO)  
リレーション・ブランディング戦略  
本部長兼ハピネス推進室長

**安達あける**  
Akeru Adachi

キャリアのスタートは銀行勤務  
海外雄飛を夢みて外為部門へ

『週刊BCN』 vol.1845 (10 / 12) 『週刊BCN』 vol.1846 (10 / 19)

269  
人目

みほ歯科医院 元院長  
日本ALS協会広島県支部長

**三保浩一郎**  
Koichiro Miho

本の制作に全力を尽くすことで  
病気を忘れられた

『週刊BCN』 vol.1847 (10 / 26) 『週刊BCN』 vol.1848 (11 / 2)

270  
人目

オーディーエス  
代表取締役社長

**砂長 潔**  
Kiyoshi Sunanaga

従業員を守り、経営を維持するため  
自ら退路を断つ

『週刊BCN』 vol.1849 (11 / 9) 『週刊BCN』 vol.1850 (11 / 16)

271  
人目

Psychic VR Lab取締役COO  
事業構想大学院大学教授

**渡邊信彦**  
Nobuhiko Watanabe

変化に適応し、  
新しい価値を生み出すことが  
ワクワクするほど楽しい

『週刊BCN』 vol.1851 (11 / 23) 『週刊BCN』 vol.1852 (11 / 30)

272  
人目

SAPジャパン  
代表取締役会長

**内田士郎**  
Shiro Uchida

海で亡くした友の無念さを思い  
志のため一念発起する

『週刊BCN』 vol.1853 (12 / 7) 『週刊BCN』 vol.1854 (12 / 14)

番外編  
こぼれ話

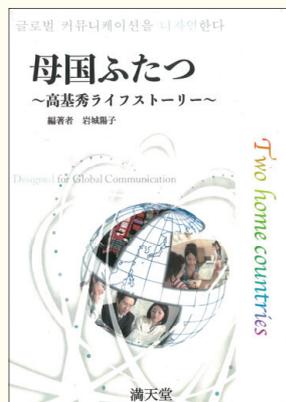
## 14年ぶりの再会 —— 高基秀 ——

博多から釜山の港まで高速船ビートルで移動した。荷物を抱えた人たちが待合室で話している。静かな会話が聞こえる。他愛のない話で、実のんびりした旅の気分になりながら乗船を待った。お客は10人もいただろうか。旅人は私ぐらいで、行商の趣が濃い人たちだ。対馬には立ち寄らないで、直行した。船は速度を上げて快走する。地図上では日韓を隔てる狭い海も、ビートルから見渡す海は、大海原と思えるほど広々している。高電社の創業者・高基秀さんは1951年冬、イカ釣り漁船の船底に身を隠して日本に向かった。つい先頃、その高電社から郵便物が届いた。

「あれ？ 何だろう」。書籍のようだが、思い当たる節はない。「おや、まあ」。これは懐かしい高基秀さんの自伝だ。「ちょっと、待てよ。亡くなられたのは2006年5月22日だから、14年ぶりの再会だ。嬉しくなる。お久しぶりです。書籍の名前は『母国ふたつ』。著者は高基秀／ライフストーリー編著者・岩城陽子。高さんの書き下ろし原稿に、奥さまが史実を添えながら肉付けをされたものだ。1934年に済州島で生まれた。故郷から早稲田大学での思い出。そして30歳の結婚と同時に大阪で電気工事業を創業。65年当時の日本は経済成長期の真っ只中である。事業を拡大しながら経営にパソコンを使おうと学ぶうちに「これは伸びる」の直感から45歳でパソコン学院を立ち上げる。先見性もあるが、それを上回る勇気がある。

高さんは当時、すでに成功者である。それなのになぜ。それも異業種での新規事業である。不安とか恐れという感情はなかったのだろうか。それだけではない。さらに創業事業の延長線上に「同時翻訳ソフト」の開発事業に舵を切っている。日本語がわからないことでおかした失態。恐怖の体験を経て、日本語を習得することの苦勞を知っているだけに、韓日同時翻訳ソフトを開発するという挑戦への動機は理解できる。しかし、挑戦するというマグマはどこから噴出するのだろうか。理解できない。同時翻訳の世界は奈落の底と言えるほどに終わりがなくて深いのだ。当時は研究機関や大企業のテーマであった。ここまで書き進めながら思う。この人は限界をつくらぬ男だ、と。

開発を進めるにはパソコンの知識が必要だ。「私は英語が読めて数学の知識があったからマイコンが理解できた」と自伝に記している。高さんの顔が思い浮かぶ。ひょっとすると、日韓の同時翻訳ソフトの開発は「母国ふたつ」という人たちが味わうすべての人々へのプレゼントソフトにしようと思われたのではないか。自身の切実な体験がエネルギーとなって、周囲に呆れかえられても永遠に手がけようと思っていたのではないか。釜山港に着いた。下船する人たちの会話はハングルになっていた。(BCN 奥田喜久男記)



【注】登場していただいた方々の肩書きは取材当時のものです。